

一九四五年七月、ドイツ　ベルリン

I

呼び鈴がけたたましく鳴らされ、私はコカ・コーラの瓶とコンビーフ・ハッシュの皿を右A卓に、潰したじやがいもの大皿を左D卓に置いて、音のした方へ向かつた。つま先でターンすると、U.S.ARMYのロゴ入りエプロンの裾がひるがえる。

アメリカ軍の慰安用兵員食堂 „ファイフティ・スターーズ“は夜のバータイムとあつて盛況だ。昼間は作り置きの料理で大食らいたちを迎える配膳カウンターはバーになり、普段の芋洗い状態が嘘のようにしつとりした雰囲気の中、白いクロスをかけた丸テーブルが澄まし顔で並んでいる。濃い青色の照明にミラー・ボールの銀がきらめき、ホールの中央で女性と頬を寄せ合い踊る軍服姿の男たちの顔や体に水玉模様を落とした。ウェイトレスの私が空いた席のグラスや皿を片付けていると、再び呼び鈴が鳴った。尻が椅子からみ出さんばかりに大柄なアメリカ兵が、太い指をくいくい曲げ、早くこっちへ来いと急かすのが見える。私がようやく奥B卓に着くなり、ミラー・ボールのせいで顔がまだらのそいつは、牛が草を食べるようになしをもごもご動かしてこう言つた。

「あの黒髪の姉ちゃんは何時に仕事を終えるんだ？」

ここで働きはじめてまだ五日も経っていないのに、この質問はもう二度目だつた。「黒髪のお姉ちゃん」は同僚のウエイトレス、ハンネローレのことを指す——彼女はちょうど右C卓で別のアメリカ兵の手の甲をつねつてゐるところだ。

「ご注文はお食事とお飲み物のみです」

ため息交じりに答えると、両隣に座つていた仲間の隊員が笑い、冷やかした。私は彼が怒り出す前に急いできびすを返したが、案の定、背後から罵声が追いかけてくる。

「気取りやがってナチ女が！」

「その頭にぶら下げてんのは豚の尻尾か？」

笑い声がどつと続く。私は豚の尻尾と蔑まれた自分のお下げを握りしめながら、大股でフロアを横切つた。あいつだつて牛みたいにくせに！　私は“ナチ”じゃない。でもあの人たちにとつてドイツ人はみんな同じなのだ。

正面のステージでは黒いドレスをまとつたドイツ人の歌手がドイツ人の楽団を従えて歌つている。でもその後ろに掲げられた大きな旗は星条旗だ。しましま模様に星をちりばめた、おもちゃの包装紙みたいなアメリカの国旗。

この地区を仕切る国家はドイツじゃなくて、アメリカだから。

安っぽいプレハブの兵員食堂がここに出来たのはつい一週間ほど前のことで、まだ接着剤やおろしたての資材の、化学的なにおいがする。アメリカ兵コックに混じつて、私のようなある程度の英語が話せるドイツ人従業員が働いてゐる。ようやく閉店時間になり、コーン油のむわつとしたにおいや茹でたじやがいものにおいから離れ、ひと息つくために厨房の裏口から外へ出る。

「sewerage」の意味がわからなかつたからつて、あいつらあたしのこと馬鹿だと思つてんの。

そつちこそドイツ語でしゃべれって話よ。所詮、自分のところの言葉しか話せないくせに」すでに休憩中だったハンネローレが他の数人のウエイトレスと愚痴を言い合っているのが聞こえてきた。青色の闇に浮かび上がった彼女たちの影に、客からもらつたらしい煙草の赤い火がぽつぽつと点る。ハンネローレは私に気づくと、「ラッキーストライクだよ」と煙草を一本くれた。白くすらりとしたアメリカ製のそれを、私はポケットに入れて明日にでもマツチと交換しようと思つた。家のマツチがそろそろなりそうだから。

「おーい、君たち！ こっちを手伝ってくれ！ 支給品が届いたんだ！」

私たちを呼ぶ洋なしのような顔の人、マクギネス特技軍曹はこここのコック長だ。

食堂裏の巨大な貯蔵庫へ行くと、輸送トラックはすでに出発したところで、搬入口の前に大量の木箱が積まれていた。側面に捺してある品名の黒いスタンプをひとつひとつ読みながら、置き場所を間違えないように運ぶ。何十個目かの箱に取りかかろうと屈んだ拍子に、そばの茂みの葉と葉の隙間から、子どもの顔が見えた。その視線の先には搬入が遅れたらしい木箱が一箱、ぽつんと置いてある。私は気づいていないふりをして、自分の分の荷物を持ち上げ、貯蔵庫へ運んだ。

朝から晩まで働きづめ、明日のためのじやがいものの皮を剥いてようやく仕事を終えたのは、夜の十時を回る頃だった。他の人と共同で使っているロッカーを開けると、私の上着がきちんと待つていた。何もかもが足りない今のこの国では、人のものを奪つて生きることがあたり前で、盗みが日常茶飯事になつていて。二日前には厨房に忍び込もうとした男性が憲兵に捕まつたし、さつきは子どもが——私は首を横に振つて考えるのをやめ、支給品のエプロンを外してロッカーに掛け、上着に腕を通した。上着は羊毛製で分厚く、真夏だから本当は脱ぎたい。でもやがて必ず来る冬を上着なしで過ごすわけにはいかないので、身につけている。自分の体が一番信頼でき

る金庫だから。ロッカーの扉を閉め、腕に白いハンカチを巻き直す。“私は降参しています”的証として。

足はだるく、腰が痛かつたけれど、右手に抱えた紙袋の重さが嬉しかった。中身は砂糖と塩の包みがひとつずつ、それに本物の小麦粉とココア。マクギネス特技軍曹が「こいつは不良品だな」と紙袋に入れてくれたのだ——おどけたワインクつきで。

嫌なアメリカ人もいれば、優しいアメリカ人もいる。悪い人間といい人間。そして大部分の、どっちでもあり、どっちでもない人たち。

じやあ私自身はどうなのか？ 少なくとも、天国へ行ける善人だという自信はなかつた。

太陽はまだ沈んだばかりで、停電時間中でもほのかに明るく、瓦礫がごろごろ転がる道でもつまずかずに歩けた。薄くなつた靴底越しに、ごつごつしたモルタルやコンクリートの感触が伝わつてくる。開けた空き地には、建設中のプレハブが星条旗を翻していた。

夏の長い長い夕暮れが、そろそろ終わる頃だつた。昼の青空よりも暗く、真夜中の漆黒の空よりも明るい、まるで貴婦人の胸元に輝くサファイアのような青い闇が、廃墟の上をどこまでも広がつてゐる。先月は夏至だつたけれど、まだ粉塵が漂うこの街で、夏の到来を祝つた人は誰かいただろうか。

外出禁止時刻をとうに過ぎ、私の他に歩いているドイツ人はほとんどいない。アメリカの将兵やその家族たちが暮らす地区から外れると、たちまち人の声や物音が聞こえなくなり、心細さと安堵が相俟つて、少し早足になる。

一日の半分を豊かで満ち足りたアメリカの施設で過ごしていると、つい祖国の敗戦と惨めな状況を忘れてしまいそうになる。立ち止まってあたりを見回せばすぐに現実に戻るというのに——

来た道を振り返れば電気の明かりがきらきら輝いているけれど、帰路に視線を戻せば光のない灰色の街が広がっている。空襲で焼けた発電所の復旧が遅いために慢性の電力不足で、特に夜は順番で停電することになっているからだ。そして浮いた電力は占領軍に回される。彼らの居住区はいつだつてきれいで明るい。ドイツ人が抗議したところで、発電所に爆弾を落とされるようなことをしたせいだからと一蹴されておしまいだろう。

顔を上げると、広告塔にかかつた“もはやドイツにはいかなる政府も存在しない”という横断幕が風に揺れた。

二ヶ月と少し前、アドルフ・ヒトラー総統が国民を置き去りにして自殺、私の祖国ドイツは降伏し、戦争に負けた。

すでに空襲でぼろぼろだつた街に勝者が押し寄せ、国民の手から国が奪われるまで、本当にあつとい間だつた。ここ首都ベルリンは、ソヴィエト連邦、アメリカ合衆国、イギリス、そしてフランスの四ヶ国に統治され、ドイツ人に発言権はない。ドイツ人は敵だつた国の命令を、幼い子どもみたいに素直に聞くしかなかつた。

特に私は普通のベルリン市民より何倍も敵に従順だ。アメリカ軍に雇つてもらい、彼らが接收したツェーレンドルフ地区の部屋に住んでいるから。

これまでドイツ人——というよりベルリン人は、アメリカが好きだつた。おしゃれでお金持ちで、食べ物が豊かで、音楽が素敵で、自由で、憧れていた。みんな「フランスやソ連は嫌なやつらでも、アメリカの好青年たちはドイツを悪いようにはしないはずだ」と期待していた。

私もそうだ。私は幼い頃からアメリカの小説やミッキーマウスが好きだつた。隠れてでも英語を勉強した。だからアメリカがやつて來た時、これで平和になると信じたし、すぐに彼らの従業

員になりたいと志願した。

なのに、今は失望してばかりいる。

爆弾の炎がいかに街を焼き、醜い姿に変えようと、夏の青い夜は美しい。風になびく旗が、黒と赤のハーケンクロイツ旗だろうと異国の旗だろうと、自然の美は存在し続いている。

そう自分に言い聞かせながら歩いていると、道ばたの瓦礫と折れた鉄骨の隙間に、小さな花を見つけた。しかし花につられて屈んだその時、崩れた煉瓦の間に渡したトタン板の下で、小さな子どもが、死んだまま置き去りにされているのが見えてしまった。何匹もの蠅がぶうんと翅を震わせ、私は慌てて飛び退き、大急ぎでここから離れた。手のひらで顔をぬぐつてもぬぐつても汗が止まらない。

アルゼンチン通り沿いの自宅に着いた私は、正面住棟の鉄門に鍵を差し込んで押し開け、体を滑り込ませた。ベルリンの住居の多くは、ジードルングと呼ばれる集合住宅で、私がこれまで暮らしてきた家も、戦争中のほんの一時を除けば、ほぼジードルングだった。たいていは四階から五階建てで地下室があり、住棟は上から見ると口の形をし、真ん中は必ず中庭になっている。ベルリン市民は中庭が好きだから。

その先は正面住棟をアーチ型にくりぬいた通路になつていて。靴音の反響を聞きながら石畳を歩き、花ではなく食べられる野菜が花壇に植えられた中庭を横切つて、奥にある第二棟の扉を開けて中へ入る。階段室の電気は消えており、壁に取り付けられた燭台の橙色をした灯の下、仄暗い階段を登つた。

帰宅すると、薄い壁を通じて隣人の怒鳴り合いが聞こえてきた。マッチを擦つて、この借り物の部屋に明かりを灯す。マッチ棒の残りはあと三本。さつきハンネローレにもらつたアメリカ煙

草一本で、マッチ箱の他に何を買おうかと考える。

私は珊瑚サンゴのたらいと水道管がむき出しの蛇口という簡素な台所にもたれかかり、蛇口をひねった。たちまち、ごぼごぼと音を立てながら水が流れ、塩素のにおいがつんと鼻を刺激する。断水状態の地区がまだ多い中、栓をひねればすぐ水が出てくれるだけ嬉しい。

私は上着も脱がず、肩掛け鞄も下ろさずに、アメリカ製の香料たっぷりの石鹼で顔や手を洗つた。水垢まみれの鏡に映つた私は、十七歳とは思えないほど老けて見える。丸い顔は疲れきつていて、腫れぼつたい目の下には青いクマがある。髪も眉毛もぼさぼさ、唇はがさつき、頑固な口角炎がまだ居座つていた。食堂で名も知らぬアメリカ兵から「ブス」と罵られたことを思い出し、ため息が出る。たとえばこの冴えない茶色の髪を染めて、肩くらいの長さまで切つてみようか、これまで何度も想像したことを探り返し、虚しくなつた。

夜になつてもまだ暑い。着の身着のまま、体も洗えず、自分でもわかるくらいに汗臭かつた。道ばたで拾つたブリキの洗面器に水を張つてベッドに腰かけ、素足を浸す。窓から差し込む月明かりが、まるで川を泳ぐ魚の腹みたいに丸々しくて生白い足を照らした。ところどころ靴擦れやまめができる、とりわけ右の踵かかとばかり赤くなっているのは、歩き方がゆがんでいるせいだと医者から言われたことがある。

いつの間にか隣室の怒鳴り合いは終わつたようで、洗面器に揺らぐ水のちやぶんという快い音がよく聞こえた。

私の部屋で生きているのは、私と、窓辺で育ちはじめたミニトマト、それから何匹かの虫たち。ミニトマトは食堂勤務の初日にこつそり押借した実を潰し、闇市で買った割れてない鉢に植えたものだ。今は黄緑色の子葉がによきによきと生え、外の様子を窺つている。

喧噪を離れ、部屋にひとりきりになると、自分という人格が体の中に戻つてくる。無理矢理身につけたお仕着せの衣を脱いで、ほつと息をつくような感覚。しかしそれに伴つて、いろいろな感情や思考がどつとよみがえりそうになり、蜘蛛の巣を振り払うように首を振つた。気を緩める記憶はすぐさま心に入り込んでくる。けなげに咲いた花の後ろで死んでいた子ども。

何か気が紛れることを考えなければ。百から七を引き続けるとか、英語の詩の暗唱とか。

私はなんとはなしに、左肩から斜めがけしている革鞄の表面を手でさすり、バックルを外して蓋を開けた。中を覗くと、配給切符と報酬の連合国マルクの束の横に、黄色い本の背表紙があるのがわかる。この御時世に本を持てるありがたさと、苦い気持ちの間で迷つているのに、手は勝手に本を取り出してしまう。

角が縫れ、ぼろぼろになつた黄色い本、『エーミールと探偵たち』。それもドイツ語の原書ではなく英訳版だ。一度私の手から離れ、もう見ることはないと諦めていたのに、ほんの数日前にかつての知り合いが届けてくれた。ページをめくると、幼い頃の私がせつせとペンを走らせ書き込んだ、つたないドイツ語訳文が読める。

未来の見えない混沌としたこの街に暮らしながらドイツ人の私がアメリカ軍で仕事を得て、ちゃんとした部屋に住めるのは、元をたどればこの本のおかげだ。それと隣人だつたイツアーケ・ペッテルハイムがくれた英独辞書。この二冊が私に英語を教えてくれたおかげ。

父さん、母さん、アッカー通りの粗末なジードルングで暮らしていたみんな。そして、小さなイーダ。みんななくなつてしまつた。私は誰も助けることができず、生まれた家も失い、思い出の欠片すら手元に残せなかつた——この本以外は。

家族や友人の顔が脳裏をよぎり、しつかり閉じたはずの心の窓に、記憶という煙が入り込みか

けたその時、誰かがドアを叩いた。

「開けろ、ここを開けろ！」

拳で乱暴に殴っている音だ。私はぎくっと震えて本を取り落とした。

「我々は合衆国陸軍憲兵隊だ。ここを開けろ！」

慌てて本を鞄にしまい、急いでドアに駆け寄つて鍵を開ける。すると間髪入れずにドアが押し開かれ、咄嗟に避けなければ顔にあたるところだつた。暗い廊下に、懷中電灯を手にした黒っぽい影がふたつ、ぬつと立つてゐる。態度と同じくらいに体の大きいアメリカ兵がふたり、MPと書かれた黒いヘルメットの下から、冷たい目で私を見下ろしてくる。憲兵だ。押し寄せる不安を抱えて何を言われるか待つていると、くちやくちやんとガムを噛んでいる若い方が、ミントとヤニのにおいが混じつた息を吐きながら訊ねてきた。

「お前はオーガスト・ニッケルか？」

いいえ、ちょっと違う。私の名前はアーグスティーデ。アメリカ人はろくに発音できためしがないけれど、訂正はとつとも諦めているので、黙つて頷く。すると若い方の憲兵が懷中電灯の眩い光をこちらへ向けた。まるで尋問に来たゲシュタポのように。

「身分証を確認する。早くしろ」

「……その光を消して下さい。かえつてよく見えません」

手で目元を隠しながら願つてみたが、下ろしてくれる気はないらしい。仕方なく、なるべく目を細めながら上着の内側に止めたピンを外し、連合国軍発行の身分証とアメリカの就労証明書を取つて差し出した。するとようやく白い光が逸れ、ちかちかする目を何度も瞬いて視界を戻さねばならなかつた。若い方がさつと確認し、年長の方に回す。

「私はアウグステ・ニッケルです。今月の十日からガリー通りにある兵員食堂 フィフティ・スターーズ”で働いています。何か……問題でも」

すぐに頭に浮かんだのは、食堂で私を罵倒したアメリカ兵の客が、苦情をよこしたのかもしれない、ということだった。もしクビになつたらまずい。上司のマクギネス特技軍曹や同僚は優しけれど、万が一あの客が将校だったら、言い逃れはできないかも知れない。階級章をちゃんと確認しておけばよかつた。今、目の前にいるふたりは、若い方が伍長で、黙つて身分証をこちらに返してきた年長の方が軍曹だった。

「あそここのウエイトレスだつてのはわかってる。あんたは見栄えがしないからな」伍長はにやつきながら私を舐めるように見た。「逆に印象に残つてるよ。まあ太つて、胸だけはありそなうだが」

そう言つて私の胸に向かって手を伸ばしてきたので、ほとんど反射的に叩いた。これでフィフティ・スターーズの看板が遠のいた氣はしたけれど、この人に触られるよりました。すると伍長は子どもみたいに怒り出した。

「このクソキヤベツ女、ヒトラーの売女ばいじやのくせにたてつきやがつて！ その肩にかけてる鞄は何だ？ どう見ても男物だろうが。いつたいどこで盗んだ？」

「やめろ伍長、彼女は我が軍が雇つた従業員だぞ。それに俺たちの任務は彼女を逮捕することじゃない」

今まで一步下がつて傍観していた軍曹がやつと動き、私たちの間に入る。

「でも軍曹」

「“でも”とは何だこのガキめ。他の住民を見張つてろ。お前が騒ぐから注目されてる」

確かに向かいのドアの隙間から、穿鑿さんさく好きな隣人が顔を覗かせてこちらを見ていた。上官に叱られた伍長が「消灯時間はとっくに過ぎてるんだ！ 寝ろ！ さっさと寝てしまえ！」と、隣家や階段室の上下に向かつて喚きちらすと、ばたばたとドアが閉まる音がした。八つ当たり中の伍長を横目に、軍曹があらためて私に向き直る。

「ミス・ニッケル、我々と一緒に来てほしい」

「こんな夜に？」

「兵員食堂は閉まっていますけど」

「兵員食堂？」

「違う、警察署だ。と言つても、うちのじゃない」

そう面倒くさそうに言うと私の肩を押し、ほとんど強制的に家から出した。さつきの件じゃない

い？ 私はたまらずドア枠を摑み、両足を踏ん張る。

「ま、待つて下さい。もう少し詳しく教えてくれませんか。いつたい何の用で警察署へ行かなければならぬんです？」

馬鹿にされないよう毅然としたいのに声が震えてしまう。こんなの、父がゲシュタポに連行された時と同じだ。党は消滅して、平和になつたはずなのに。政治犯として収容所に入れられ、そのまま帰つてこなかつた父のことが頭を過ぎる。

すると軍曹は心底どうでもよさそうに言つた。

「悪いがアカを恨んでくれ。君を呼んでいるのはやつらなんだから」

「アカ……つまり、ドイツ共産党のことですか？」

「残念だが外れだ。ソヴィエトの連中だよ」

ソヴィエトと聞いた瞬間、ぞつと肌が粟立つた。

「嫌です。ソ連のところには行きたくありません」

あの人たちとの繋がりなんて、あの日、私の身に起きたこと以外に心あたりがない。ほんの数ヶ月前に彼らからどんな目に遭わされたか、もしその時の抵抗が原因で呼ばれているのだとしたら理不尽だと軍曹に打ち明けてアメリカの助けを求めようとした。しかし軍曹は聞く耳を持ってはくれなかつた。

「ああ、赤軍兵が女性たちを強姦してまわった話は聞いている。珍しい話じやない。悪いが君に拒否権はないんだよ。いいから早くしてくれ、こちらも暇じやないんだ」

真夜中、本物の黒い闇に包まれたアルゼンチン通りを、北東へ向かつて走る。アメリカ軍のかの有名な“ジープ”は幌を開いていた上にドアがなく、まるで骸骨のあばら骨の中に座つているかのような、すかすかした心もとない感じがした。風がまともに吹き込み、スカートの裾がひるがえつてしまふし、押さえようにもどこかに攔まつていないと揺れたはずみに落ちてしまいそうで、恐ろしい。

運転席と助手席の憲兵たちは無言で、連行の理由を訊ねてみても無視された。軍曹のふかす煙草の赤い火が、ホタルのように闇に揺れる。緊張で冷たくなつた指先を揉みながら、輝く月を眺めて不安を紛らわせた。

長い間——六年もの間、この都市で夜に光を見ることは、ほとんどなかつた。空襲に備えた灯火管制で、窓には分厚いカーテンが、車の前照灯には覆いがかけられたためだ。もし守らなければ地区防災責任者が怒鳴り込んできて、罰金を支払うはめになつた。だけど今はたとえ建物が傾いていても、窓は開かれ、蠟燭の暖かな橙色の火があちこちに浮かび、人々がここで生きているとわかる。

吹きつける風はうんと不潔に作ったアイントブフのようにごたませのにおいがした。石炭が燃える煙たいにおい、じやがいもや豆を煮るにおい、栄養失調のせいですさまじい腐敗臭を放つ排泄物のにおい。生と死が放つ悪臭。そしてこのジープからは、甘つたるいくせにすうつとする、ペーミント味のチューリングガムのにおいがする。

灯火管制がはじまつた年、つまり戦争がはじまつた六年前の私はまだ十一歳で、それ以前のこととはほんやりとして曖昧だ。私にとつてベルリンは市ではなく“大管区”だし、夜の風景といえば、暗い道に夜間蛍光塗料の緑色がおぼろげに光る怪しげなものだつた。

ほんの数ヶ月前まで街にはNSDAP、これからは進んでナチスと呼ぶべき党の赤い腕章をつけた党員たち、それにきつちりとプレスの利いた黒い制服姿の親衛隊が大勢いた。しかし今、彼らの姿は消え去り、代わりに星条旗つきの軍服をだぶだぶとだらしなく着崩した“アミー”たちが、街をうろついている。

本来のベルリンはどこまでも真つ平らな街だつた。でも今は、ジープは何度もはずんだり、急に曲がつたりと、かなり蛇行しながら走る。石畳が悪路なだけでなく、道に溢れた瓦礫はまだまだ片付かず、あちらこちらで山となつて積まれているせいだ。運転席でハンドルを握る伍長は何度も舌打ちした。

一時間ほど走つただろうか。ようやく中央にたどり着いた。賑やかだつた通りが嘘のように、空襲や市街戦で方々が焼け崩れ、ほとんどの建物が無残な瓦礫と化していただけれど、それでも自分がどこにいるかはわかる。ネオンが消えてしまつた映画館のウーファ・パラストの前を通り過ぎ、黒ずんだラントヴェーア運河を渡つた。もうすぐベントラー通りに差しかかる。私は急いで首をひっこめ、できるだけジープの外から自分の姿が目立たないように背中を丸めた。

私は赤軍兵と口をききたくなかったからだ。このゲートの先はソヴィエト連邦の管理区域になり、近くにはかつての陸軍最高司令部を乗つ取つたソ連の最高司令部もある。

検問所が見えてくると、運転席の伍長はアクセルを踏んだまま、直進して突つ切ろうとした。しかし笛がけたましく鳴り、道路を照らす投光器の光の中に赤軍兵が飛び出してきて、伍長は慌ててブレーキを踏む。

「おい、いい加減にしろよ！」

伍長は怒鳴つて威嚇しようとするが、ジープを止めた赤軍兵は無表情で、まるで意に介していないかった。頭に糊のりの利いていないナプキンのように。ペちゃんこな略帽を載せた、丸顔の東洋人歩哨だった。ソ連軍にいる東洋人をみんなモンゴル人兵と呼んでいたけれど、本当のところはよく知らない。

「プローブスク」

「プローブ……？　ああ、身分証か。そんなもんいらないだろ、どこの管理区域も行き来は自由なんだから。ああ、英語がわからんないのか」

小馬鹿にした態度を崩さない伍長に赤軍兵は更に詰め寄つて、汚れた手のひらをジープの中に突っ込んでくる。不機嫌そうに唇をとがらせ、腫れぼつたい目でこちらを睨みつける。金ボタン付の窮屈そうな詰襟は垢で黒ずみ、まだらになっていた。

「プローブスク」

「あのなあ、俺たちはあんたらに依頼されて來たんだぞ。さつきと通せよ」

外の様子を窺えば、十人近い数の赤軍兵がじつとこちらを監視していた。彼らは私にとつて、アメリカ人よりもずっと未知の存在だった。軍人といえば一般人よりも素敵な制服を着ているも

のだと思つていたのに、東からやつて来たこの人たちは、布の染料が足りなかつたのか、微妙に色の濃淡が違う、毛玉だらけですり切れた薄っぺらいスマックやキルティングの上衣、汚れたままのズボンを軍服と呼んでいた。肩には武骨で素朴な形のライフルを担いでいる。

「おい伍長、身分証くらい出してやれ」

「イエス、サー。わかりましたよ。つたく」

アメリカの伍長はぶつくさと悪態を吐きながら、運転席の下に腕を伸ばして何かを出そうとした。しかしその時、うつかりしたのかそれともわざとなのかわからないけれど、赤軍兵はライフルを肩から下ろし、銃口が伍長の顔に当たつた。

後の展開はほんの五秒ほどのうちに起つた。頭に血が上りやすい伍長は、よせばいいのに、胸のガンホルダーから拳銃を抜いて赤軍兵に突きつけてしまつた。

軍曹が慌てて止めた時にはもう遅く、ジープをじりじりと取り囲んでいた他の赤軍兵たちまでも暴れ出し、腕が何本も伸びてきた。軍曹と伍長は服を攔まれ、英語とロシア語、そしてどこかわからない言語が入り交じつた怒声が飛び、投光器の真っ白い光の下、黒いヘルメットが転がり、赤い軍帽が飛んだ。私も悲鳴を上げて目の前に迫り来る手を払いのけた——しかし軍人の力に敵うはずもなく無理矢理引きずり下ろされ、膝と手のひらを強かに打つた。四つん這いになつたまま、そつと右手を開いてみると、掌が擦れて真っ赤になつていた。

後ろからロシア語でどやされ、襟元を攔まれて顔を上げれば、異国の男の瞳が私を覗き込んでいた。まるで獣のように粗野で獰猛な瞳。知らないにおい。意味のわからない言語——たちまちあの時のことが甦り、どつと汗が噴き出した。思い出したくない。思い出したくなんかないのに！

その瞬間、一発の銃声が轟き、全員びたりと動きを止めた。

アメリカ軍のジープの前で、ひとりの軍人が右腕を高く挙げ、拳銃を空に向けていた。威嚇射撃だ。続いてもう一発、雷鳴のような轟音が響き渡り、私は体をびくりと震わせた。火薬の煙が闇の黒と投光器の白の境目にふわりと漂う。

ソ連の軍人に間違いはなかった。しかし他の赤軍兵とは明らかに雰囲気が違う。軍帽の黒い庇と赤い帯は同じだけれど、山は目の覚めるような青色だった。ズボンも青く、上衣にはアイロンが利いてピンと張りがある。

突然現れた青帽子の男は他の誰よりも若く見えた。けれど彼が鋭い口調で何かを命じると、暴れていた赤軍兵たちは互いに顔を見合させ、それぞれの持ち場へ戻つていった。まるでより強い群れの邪魔が入り不服そうな犬のようでもある。

それでもこの反応に満足したのか青帽子の青年は銃を腰ベルトのホルスターにおさめる。それとほぼ同時に傍らに停まつていた車のドアが開いた——ソ連の将官が乗る、いかにも高級そうな黒いエムカだ。中から現れたのは、同じ青色の軍帽とズボン姿の将校だった。将校は軍人にしては華奢な体躯だが、勳章が五、六個ほど左胸に輝いている。威嚇射撃を行つた若者も素早く敬礼した。

地べたに尻餅をついたまま呆然と目の前で起こつたことを眺めていたら、後ろでエンジンをぶかす音がした。私をここへ連れてきたアメリカの軍曹と伍長はいつの間にかジープに戻り、タイヤを急回転させて後退すると、土埃を立てながら来た道を走り去つた。

「待つて、置いていかないで！」

叫んでももう遅い。ジープは闇に消え、私はソ連の管理区域内にひとりで取り残されてしまつ

た。これからどこへ行けばいいのかわからぬのに。検問所の様子を窺うと、赤軍兵たちはジープが去つたことは気にとめず、あっさり任務に戻つていた。さつきまでの騒ぎが嘘のように平常で、私のこともどうでもよさそうだ。私はこの隙に家に帰ろうと腰を上げ、肩掛け鞄を腕に抱きかかえ、そつとここから離れようとした。しかし後ろから呼び止められてしまった。

「フロイライン・アウグステ・ニッケル？」

おそるおそる振り返ると、先ほど黒いエムカから降りてきた青帽子の将校が立つていた。

「安心して下さい。私は何もしない」

かすかにロシア語訛りが残るもの、将校は非常に流暢なドイツ語を話した。

「労農赤軍の同志が手荒な真似をして申し訳なかつた。私は内務人民委員部、N K V Dのユーリイ・ヴァシリエヴィチ・ドブリギン大尉。あなたを迎えてきました」

間近で見ると、痩せた将校はまだ若く、二十代半ば程度ではないかと思つた。頬骨が尖つた精悍な顔立ち、鼻の下に黒い髭を生やし、灰色の瞳には鋭い知性の光があつた。私は鞄と一緒に逃げ帰りたい気持ちを抱えたまま、ドブリギンと名乗つた大尉の後について検問所を通つた。今度はもう「プローブスク」とは言われなかつた。

エムカの横には先ほど威嚇射撃を行つた若い軍人が立ち、後部座席のドアを開けて待つていた。背が高く、肩幅もがつしりとしており、顔にはそばかすがあつた。

「彼はベスパール以下級軍曹で、私の忠実な部下です。運転の腕は確かですよ」
ドブリギン大尉に紹介されたベスパール以下級軍曹は、ちらりと私を一瞥し、早く乗れと言わんばかりに顎をしゃくつた。

暗い道を走りながらも北東に向かつているのだとわかつたのは、荒廃したかつての大目抜き通

りウンター・デン・リンデンから、黒々と流れるシュプレー川を越え、ベルリン大聖堂の焼けた天蓋が見えたからだ。左隣に座るドブリギン大尉の様子をそれとなく窺う。黒革の長靴には艶があつて汚れはなく、濃いカーキ色の上着も清潔そうだった。

じろじろ観察していると、灰色の瞳と視線がかち合い、慌てて逸らしたが、気づかれていた。「エムカに乗るのははじめてですか？」

「……ええ」

「アメリカーニエツのジープより乗り心地がいいでしよう。これから向かう先は警察署ですが、不安ですか？」

ドブリギン大尉の口調は柔らかく、紳士的で、私はいくらか警戒心を解いた。

「はい……アメリカの憲兵は連行の理由を話して下さいませんでしたので」

内心では、あの時のこと、市街戦の最中に私が殺した赤軍兵のことで連行されるのだと考えていた。

夜明けの前は最も暗いと言うけれど、終戦間近のあの日々は暗いどころではなく、生き地獄だった。国境の防衛戦を突破した赤軍兵にとつては、憎い敵国の女なんてただの穴の空いた温かい袋としか思えなかつたのだろう。

あの日、隠れていた地下壕から赤軍兵の乱暴な手で引きずり出された女たちの中には、八歳の女の子と八十歳のお婆さんがいた。私も例外にはなれなかつた。あれが起きるまでは月経なんて煩わしくて憂鬱な厄介者だと思っていた。六月の上旬にふたたび血が出てきた瞬間、私は嬉しくて泣いた。病院で看護師からもらったカーテンの切れ端を股にあてがいながら、とつくの昔に嫌いになつていた神様にありがとうと呟いた。

あんな惨めな思いはもう二度とごめんだつた。

私はあの時、襲いかかってきた赤軍兵のライフルを奪い、無我夢中で彼の喉を撃ち抜いた。珍しいことではない、なにしろ市街戦の只中での出来事で、彼はことの最中、ずっと私のあごの下にナイフを突きつけていた。やらなければ私が殺されていたかもしない。現に、強姦の挙句命まで奪われた無残な女性の死体を見たことがある。私たちは敵同士だった。戦争だったのだ。

しかし戦争が終わつた今、ドイツ人は戦中の行為で罪に問われるようになり、私も他の人と同じく逮捕されるのだろうと思つた。

けれども大尉の様子には違和感があつた。

「それはそうでしょう。アメリカ軍には必要最低限の情報しか与えていませんから。赤軍にも軍政府にすらも明かしていません。今回の事案は私自身が直接管轄しています。間もなく到着しますので、今しばらく辛抱して下さい」

辛抱。もし私を同胞殺しだと思ってるなら、こんな言い方をするだろうか。もやもやした疑問は解消されないまま、大尉の言うとおりそれから十五分ほどで、東地区の大通りプレンツラウアーベルクの警察分署に着いた。

両翼を広げた鷺とハーケンクロイツの彫刻の上には看板が重ねられ、太く大きなキリル文字で何ごとか書かれている。すぐ下に小さくドイツ語で「市警察」とあったので意味は理解できただけれど、ドイツ語は肩身が狭そだつた。

警察分署の中は、以前と同じ秩序警察の緑の制服を着た人が何人かいたけれど、寒々しいほど閑散としていた。壁には「求む人員 求む眞の警察官 今こそ正義の人民警察設立を！ 自由ドイツ国民委員会」と書いた紙が貼つてある。

戦争が終わった後、親衛隊や警察をはじめ、ナチス党員は連合国軍が戦犯収容所に連行したので、どこの警察署も人員不足だという話を思い出した。その代わりなのか、それともドイツ人の監視役なのか、軍服姿のロシア人があちこちにいて、一切笑うことなく唇を固く結び、目を光らせていた。

建物の内部は薄暗いものの、電気は通っていた。正面の壁に取り付けられた細長い蛍光灯はいかにも息絶え絶えといった様子で明滅している。その下に、ぶかぶかの制服を着た頼りなさそうな中年男性が、うつむいて書き物をしていた。ドブリギン大尉が声をかけると氣の毒なくらいに狼狽しながら、ずり下がった眼鏡をすりあげ「どうぞ奥へ、フロイライン」と促した。

靴音がやけに響く廊下を歩きながら、ドブリギン大尉は言った。
「あなたにはある人物の遺体を確認してもらいます。ミッテの検死所は爆撃されて使えないのですよ」

通されたのはホルマリンの刺激臭が充满する小部屋だった。中央に処置台が置かれ、上にかぶせられた緑色の覆いは、ここに誰かが横たわっているとわかる、人形に膨らんでいた。きっと私の殺した赤軍兵だ——しかし、よく考えれば二ヶ月以上も前の遺体がここにあるはずはなかつた。中央の処置台のそばには禿頭の男性が立っていた。すり切れた上着のポケットにはハサミが何本か入っていたので、きっと医師なのだろうと見当をつけた。彼はぞんざいな仕草で緑の覆いを取り去り、私は思わず「あっ」と声を上げた。

横たわった男性の遺体。その蠟人形のようなくぐく、生氣の失せた顔と手足。処置台からはみ出しそうなほど大きな体、がっしりとした四角い顔、豊かな白髪。かすかに開いたまぶたから覗く薄茶色の瞳は、私が殺した赤軍兵のものではなかつた。別の男、知っているドイツ人だ。

クリストフ。クリストフ・ローレンツ。

信じられない。

驚鼻で唇は薄く、右頬の下には赤紫色の小さな痣あざがある。年齢は六十歳を過ぎているはずだ。最近ひげ剃りでもしたのか、あごには細かな擦り傷があり、唇の横に白い泡のようなものがこびりついている。

「この男性が誰か知っているかい」

医師は東欧訛りのある声で私に訊ねてきた。

「はい、知っています」

「彼の名前と、彼との関係は？」

「名前はクリストフ・ローレンツです。関係は……私にとつて、いわば恩人です。いつ、亡くなつたんですか」

「今日の昼だ。自宅で倒れた」

まるで心に、鎖でつないだ重い鉄の球をぶら下げられたような気分だつた。

「……まさか自殺ですか」

「ドイツ人の自殺は確かに頻発しているがね、彼の場合それはあり得ない。詳しくは後で警察から聞いてくれ」

「後ろに控えていた大尉から廊下で待つように命じられ、私はよろめく足をひきずつて外に出る。途端に胃が猛烈にむかつき、私は慌ててトイレへ駆け込もうとするも間に合わず、廊下の隅に酸っぱい胃液を吐いた。

まさか——まさか死ぬなんて。息が苦しく、壁に手をついたままざるざると床にうずくまる。

あの憎らしい赤軍兵の遺体が現れてくれた方が、まだましだった。タイル張りの床はひんやりと冷たくて、夏なのに寒氣で体が震えた。

私は彼がなぜこんなところにいるのか理解できなかつた。なぜソ連の管理区域に？ ローレンツ夫妻の住まいは、ここからずいぶん離れたシャルロッテンブルク地区だつた。空襲で邸宅が燃えたのはよく知つている。でも、その後も馴れ親しんだ西側の家を見つけて暮らしているとばかり思い込んでいた。

ドブリギン大尉はすぐに安置室から出てきて、床に座りこんだ私の腕をそつと、しかし振りほどけない程度にはしっかりと握り、階段を上がつた奥の部屋へといざなつた。黒いドアの前には大柄な女性、赤軍の軍服をワンピースに仕立てたものを着た軍人が立つていて、大尉と目配せし合いドアノブを押し開ける。

通された部屋は廊下よりも暗く、中央の机の上のデスクライト以外に光はなかつた。机には黒髪をぴつちりと横になでつけた、瘦せぎすのドイツ人警察官が座つており、鉛筆を走らせ何かをしたためている。ドブリギン大尉がドアを閉めると、警察官は顔を上げた。眼鏡のレンズにライトが反射して、トンボの複眼のように感情が読み取れない。

「座つて下さい」

私は黙つて向かいに座り、大尉は警察官側に回つて椅子に腰掛けた。

壁にかかつた肖像画はもはやヒトラー總統ではなくスターインで、もつさりした口ひげの新しい指導者が虚空を見つめていた。この部屋はどう見ても取り調べ室だ。緊張で口の中が渴いて仕方がない。

「これは尋問でしようか？」

すると警察官はちびた鉛筆の先をペロリと舐め、淡々と答えた。

「ええ、簡単な質問をしたいだけです」

たっぷり脂汗をかいていると悟られないように、私はそつとスカートに手のひらをこすりつけた。

「フロイライン・アウグステ。昨日と今日、どこで何をしていたか教えて下さい」

「ずっと働いていました。ダーレム地区ガリー通りの兵員食堂『フィフティ・スターズ』で、朝八時から夜十時過ぎまで」

就労証明書を見ると、警察官は眼鏡をずらし口を半開きにしながら書類を読んだ。横を向いたので眼鏡のつるを補修した跡が見えた。

「確認しました、お返します。仕事中に外出などは？」

「そんな暇はありません。食事も厨房でまかないを食べているくらいです」

「出勤前と退勤後はどこにいましたか？」

「家と仕事場の往復です。朝起きて、一キロメートルほど離れた仕事場へ歩いて向かい、一日中働いて、くたくたになつて帰宅したらすぐ眠ってしまいます。勤めはじめてから五日ほどですが、判で捺したように同じ生活です」

「この仕事につく前はどこにいましたか？」

「アレクサンダー広場近くにあつた野戦病院で手伝いをしていました」

「あなたは看護師？」

「違います。ただ、その……市街戦で負傷して、回復した後も行くところがないので、そのまま

看護師の真似ごとをしたんです」

“負傷”と言うにとどめたけれど実際は、赤軍兵とのあの後に感染症で倒れ、病院で目を覚ましたのだった。幸い警察官はそれ以上追及してこなかつた。

「わかりました。それで今月の八日にアメリカ軍がやつて来てから、すぐ雇用を申請したということですね。リヒターフエルデの米独雇用事務所？」

私は頷いた。これ以上何も聞かずに解放してほしい。しかし残念ながらそはならなかつた。

「クリストフ・ローレンツ氏と最後に会つたのはいつですか？」

つま先でタイル張りの床を引っ搔くようにして足を組み替え、私は天井を睨んだ。

「少し待つて下さい、思い出しますから」

本当のところ、思い出すだけなら造作もなかつた。しかし頭が混乱してなかなかうまくいかない。鼻の奥がつんとして、油断すると涙が溢れてしまいそうだ。クリストフの遺体を目のあたりにしてから叫びたい衝動を堪えるのに必死だつたし、警察に語るにはありつたけの勇気が必要だつた。幼かつたイーダや両親の顔が脳裏に浮かんでは消え浮かんでは消える。まるで私を呼んでいるかのようだ。

それでもどうにか言葉をかき集め、私はひと呼吸置いて説明をはじめた。

「……確かに、二年くらい前です。空襲が激しくなる直前に別れました。イーダが隠れ家で亡くなつたので、私はもうクリストフとフレデリカの家にいる必要がなくなりましたから」

「イーダというのは？」

「ポーランド人労働者の少女です」

「なるほど。ローレンツ夫妻が戦争中にナチスの迫害から潜伏者を匿っていたのはこちらも把握しています。あなたはそのイーダという名の少女を夫妻に預けたわけですね。いつたいどういう

経緯で？」

「イーダは迷子でした。父と勤務先の工場から一緒に帰る最中に、たまたま見つけたんです。私はアツカーリ通りに住む労働者の娘で、近くには外国人労働者たちの集団収容施設^{ラグ・ゲル}がありました」

そう、あれは四三年がはじまつたばかりの真冬のことだつた。深い霧が出て、寒い夜だつた。戦争の旗色が悪くなつてゐるのは、配給品が一層少なくなり、ほんの少しの贅沢もできなくなつたあたりから、みんななんとなく察していた。占領地からやつてきた外国人労働者はますます増え、私が手伝いをしていた工場でも大勢が働いた。

「あの夜、イーダはひと氣のない教会の前にぼんやりと立つていました。傍らには車に轡かれたらしい女性が倒れていて——たぶん母親だろうと思いますが、すぐに亡くなりました。胸にボーランド総督府から來た労働者を示す“P”的布バッジをつけて。イーダはまだ子どもでした」

すると警察官はいつたん鉛筆を走らせる手を止めて、私を見た。

「子ども？ ポーランド総督府からの強制労働者は、十六歳以上という決まりでは？」

「ええ、そうです。でもイーダは実際、十歳そこそくだったと思います。私の父は、イーダの母親がどうにか誤魔化して連れてきたのではと推測しました。大量に移送されてきた時期でしたし、イーダは失明していく……ひょっとしたらラーゲルで監督官にばれて、逃げる途中だつたのかもしれません。とにかく父と私は、もしこのままラーゲルに戻したらこの子は処分されると考えました。それで、密かに保護したんです」

党——ナチスは、“犯罪者のいない美しい民族共同体”を作るために、たくさんの人を迫害の対象にした。ユダヤ人はもちろん、スラヴ人やポーランド人、ツイゴイナー（ロマと呼ばれる人々を指す当時の蔑称）に共産党員、病人や障碍者、などなど。私と両親は人種調査局が発行し

た正式なアーリア人種の血統証明書と、驚章判付きのドイツ国籍を持つていたけれど、父は政治犯として処刑されたし、母は連行される前に自ら命を絶つた。

祖父母もきょうだいもいない私にとって、イーダは最後に残されたたつたひとりの身内だった。でも結局、守れなかつた。

「イーダはしばらくの間一緒に暮らし、私にとって妹のような存在になりました。でも、私の両親がゲシュタポに狙われ、彼女を家で匿うのが難しくなつたので、フォルクスピューネ裏の書店を通じて地下活動家を頼つたんです。その潜伏先が、フレデリカの所有する船小屋でした」

「しかし亡くなつたと」

「ええ」

「お気の毒に」

私はため息を抑えられなかつた。船小屋の湿つた床板に敷かれた薄い毛布の上に寝かされた、斑点だらけになつてしまつた小さくて細い体が、記憶にこびりついて離れない。このまま感傷に浸り、机に突つ伏して泣くことができたら、どんなによかつただらう。

しかしその時、これまでずっと沈黙を守つてやりとりを見ていたドブリギン大尉が、さつと手を動かし、デスクライトを私に向けた。眩しい。眩しくて目を開けられない。それで悼む気持ちが散り、私は現実に引き戻された。

「イーダという少女はなぜ亡くなつたのです？」

ドブリギン大尉の口調は穏やかではあつたが、明らかに尋問がはじまつっていた。
「病氣です。私も何度か食事を運ぶのを手伝いましたが、気づいた時にはもう」

ドブリギン大尉は合図で警察官を脇に引かせると、机に両手をつき、私の真正面に立つた。ラ

イトの強い光に浮かび上がったその瘦せた顔に、ぞつと寒気が走る。

「あなたはまだ、クリストフ・ローレンツ氏の死因を知りませんでしたね」

「……はい、何も」

「そうでしょうね。彼は歯磨き粉で亡くなつたんですよ」

かすかに微笑みながら言う大尉に、私はどう答えればいいかわからず、間抜けな鸚鵡返しになつた。

「歯磨き粉、ですか」

「驚くでしよう。歯磨き粉で人が死ぬなんて、私も聞いたことがありません。しかし笑いごとではないのですよ。現実にクリストフ・ローレンツは、歯ブラシに絞り出した歯磨き粉を口に含んだ瞬間に事切れたのですから。プレンツラウアーベルクの自宅で、妻フレデリカ・ローレンツの目の前で。歯磨き粉には青酸が混ぜ込まれていました。先ほど医師がお話ししたとおり、このことから自殺は考えられません。首を吊つたり飛び下りたりすればすぐに死ねるのに、わざわざ歯磨き粉に毒を仕込んで死ぬ人間がいるでしょうか。それに、この物不足の街で、どうやつて歯磨き粉を手に入れたのかという疑問が湧きませんか?」

ドブリギン大尉はそう言つて、私の目をひたりと見据えた。

ここに連れてこられた意味がようやくわかつた。何か言わなければ。しかし声が出なかつた。

水がほしい。唾を飲み込もうにも口の中はからからだつた。

大尉は上体を起こすとさつと手を挙げ、後ろに向かって合図した。すると奥の壁の一部分が、ふいにするりと横にずれた。室内の暗さにまるで気づかなかつたけれど、隣室と繋がる隠し窓になつていたのだ。

窓扉が開かれたガラス張りの隠し窓に、先ほど威嚇射撃をした、あの背の高い下級軍曹に伴われて、ひとりの女性が姿を現した。記憶の中の彼女とはずいぶん違っていたけれど、間違いない。

「フレデリカ」

クリストフの妻、フレデリカだ。以前はぼつちやりとして肉付きがよかつたのに、今は見る影もないほど痩せ、裕福で上品だった婦人の面影は消え失してしまった。フレデリカは私と目が合うと、さつと視線を落としてしまった。ドブリギン大尉のひどく冷徹で淡淡とした声が耳に響く。「フレデリカ・ローレンツは通報者であり、夫殺しの疑惑もかけられています。あなたはどう思いますか、フロイライン・アウグステ・ニッケル？」彼女は夫を殺すような人物でしょうか

ドブリギン大尉は体を横にずらし、隠し窓がよりはつきり見えた。ガラスに光が反射して、私自身が窓に映り込み、フレデリカの隣に立っているようだつた。

「私は」声がかすれ、咳払いをした。「フレデリカとも最近は会つていませんでした。今はどこに住んでいるのかすら知らなかつたくらいです。だから、わかりません」

「ならば、あなたが会つていた頃の夫妻はどうだつたか答えて下さい。ふたりは親しかつたですか？ 揉めごとなどは？」

「普通の夫妻だつたと思います」

「普通とは？」

ドブリギン大尉は片眉を持ち上げ、口調は少し苛立ちを帶びはじめていた。

「つまり、その……険悪ではありませんでした。クリストフはチエロの演奏家でしたが、フレデリカは彼の才能と寡黙さを尊重しているように見えましたし、クリストフも裕福な妻を羨まずに、明るい彼女を愛していましたと思います」

夫妻はシャルロッテンブルクの賑やかな繁華街や工場街から外れた、湖畔近くの静かな地区に住んでいた。聞いた話では家はクリストフのものでなく、プロイセン貴族の血を引く一家の末娘であるフレデリカの持ち物だった。ベルリンで特に富裕層が暮らす南西部よりもシャルロッテンブルクを選んだのは、その方が音楽や文化に触れられるからだそうだ。演奏家で内向的なクリストフと、もてなし上手で社交的なフレデリカ。夫妻は表向きはナチス高官のお気に入り、裏では潜伏者に所有している家や小屋を貸す地下活動家という、二重生活を送っていた。しかし二年前の空襲で邸宅も焼け落ちた。私がふたりの家を出たのはその直前のことだった。

「それにフレデリカが人を殺すだなんて想像もつきません」

「つまり、クリストフの死にはフレデリカは関わっていないと」

「はい、そう思います」

「慈善家であろうと、衝動に駆られれば人を殺すこともあるのではないか？」

「……そうおっしゃられても。私の知るフレデリカのことをお話ししたまでです」

「わかりました。では少し河岸かを変えてみましょう。クリストフが使った毒入りの歯磨き粉ですが、アメリカ製の『コルゲート』だつたのです。これはCARLE^{対欧洲送金組合}バックージと呼ばれる支給品に含まれているそうですね——あなたもご存知でしょう。アメリカ軍に従事するドイツ人に配られる報酬ですから。ベルリンの一般市民にとつては、きっと黄金ほども価値があるものでしようね。歯磨き粉は石鹼以上に贅沢品ですし、とりわけアメリカ製とあっては、品質も安定しているでしょから。

「ところで、あなたもコルゲートを支給されましたか？」

「矛先がついにこちらに向いた。」